

「ヘンリー5世」における諷刺的衝動

大和, 高行

<https://doi.org/10.15017/2332558>

出版情報 : 文學研究. 91, pp. 51-72, 1994-03-25. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

『ヘンリー 5 世』における諷刺的衝動

大 和 高 行

I

『ヘンリー 5 世』は権力に対する諷刺の側面を持つ作品である。この作品、即ち、歴史劇『ヘンリー 5 世』のテキストには、「歴史」形成の際に起こる不条理をアイロニカルな表現によって諷刺的に浮き彫りにしようとする作者シェイクスピアの意図が認められる。そのような、権力に対する批判ともとれる政治的に危険な描写がなされている場面において、シェイクスピアのテキストでは諷刺の対象は国王から教会側へとずらされ、国王ヘンリーに対する直接的批判と見做されぬよう創作上の配慮がなされている。

シェイクスピアが書いた『ヘンリー 5 世』のテキストには、この戯曲そのものが孕んでいる、ある問題が厳然と存在する。そして、このことは、この芝居が上演において様々な演出を可能ならしめる要因となっている。以下に挙げる二つの代表的な映画『ヘンリー 5 世』に見られる演出の違いは、この歴史劇のテキストが、当然、舞台においても幅広い演出の可能性を許す点を明確に示す映像的証拠となる。

映画『ヘンリー 5 世』(1944)において、Sir Laurence Olivier は宿敵フランスとの戦いに勝利をおさめ、英国に歴史上の栄光をもたらした若き名君ヘンリー 5 世の役割を演じた。映画監督でもある彼は映画の冒頭を当時の劇場での舞台上演の再現シーンから始めることにより、この芝居を観ているイギリス人

観客の反応の様子をリアルタイムに示す点に成功している。一方、Kenneth Branaghの映画『ヘンリー5世』(1989)では、取り扱われる場面の選択は概ね前者と共通するが、映画作りの基本姿勢が前者とは根本的に異なる。以下、これら二つの映画が持ついくつかの特色に触れながら、この戯曲が内包する政治的な問題点がシェイクスピアのテキストには明確に登録されているにも拘らず、演出の仕方によっては、いかに遠景化され得るかという点を指摘する。さらに、シェイクスピアのテキストに登録されている政治的問題を孕んだ箇所がこの作品の中で観客の諷刺的衝動とどのように結び付き、また、結果として、演劇的にどのような効果をもたらすかという点についても分析を試み、議論する。

Olivierの映画では、第一幕第二場に相当する場面で観客のリアクションに焦点が当てられる。そこでは観客の歓喜の様子が映しだされ、その反応描写から、この場面がイギリス人観客に専ら好意的に受け入れられるための要素を多分に有している点が映像的に証明される。Olivierの映画を観る限り、主として役者を通じて伝達されるユーモアのセンスの面白さと宿敵フランスに対し堂々たる態度で臨むヘンリーの姿の勇ましさと、いわば、二種類のプラスの要素によって観客の興奮が高められてゆく様子が描かれているようである。

おそらく、Olivierのような演出において明らかであるように、シェイクスピアの時代の上演の際の検閲、即ち、饗宴局長による行政上の検閲においても、この箇所は一見しただけでは何ら王政にとって不都合を有さない、政治的に安全な場面であると見做され、その問題性は当局の特別の指摘を受けずに済んだかもしれない。だが、以下に指摘するように、Olivierの映画の該当の場面、即ち、観客に特に受けのよい第一幕第二場の二つの箇所は、実際のシェイクスピアのテキスト上では、それぞれ、中心的制度に対する観客の批判精神を導くべき政治的に危険な問題を孕んでいる。

まず、第一の該当箇所に関しては、カンタベリーの大司教がヘンリーに対し、「歴史」を振り返った場合、フランスの王位を要求することが英国王である彼

にとって明白かつ正当な権利である点を法的解釈によって証明しようとする場面に、ある問題性を認めることができる。

There is no bar
To make against your Highness' claim to France
But this, which they produce from Pharamond:
.
Besides, their writers say,
King Pepin, which deposed Childeric,
Did, as heir general, being descended
Of Blithild, which was daughter to King Clothair,
Make claim and title to the crown of France.
Hugh Capet also, who usurp'd the crown
Of Charles the Duke of Lorraine, sole heir male
Of the true line and stock of Charles the Great,
To [fine] his title with some shows of truth,
Though in pure truth it was corrupt and naught,
Convey'd himself as th' heir to th' Lady Lingare,
Daughter to Charlemain, who was the son
To Lewis the Emperor, and Lewis the son
Of Charles the Great. Also King Lewis the Tenth,
Who was sole heir to the usurper Capet,
Could not keep quiet in his conscience,
Wearing the crown of France.... (1. 2. 35-80)²⁾

Olivier の映画では、カンタベリーの大司教の助手として登場するイーリー司教の道化的演技、即ち、判例の根拠となる書類を観客の目の前で順序をばらば

らにして散らかしてしまう行為が強烈な滑稽さを印象づける。それゆえ、この場面で観客の間から湧き起こる笑いは、一見、観客の享楽的心理作用によって専ら得られているかのように見える。だが、実際は、ここで大司教がまことしやかに長々と述べるスピーチの内容自体にも、物事をアイロニカルに捉えようとする観客の心的作用を刺激し、イーリー司教の喜劇的な振舞いによって得られる笑いをさらに増長させるべき、ある要素が明確に存在する。この場面における観客の笑いの原因を分析する上で、この点は決して見逃されるべきではない。ここで注目すべきことは、ヘンリーが自身にとって都合のよい解釈を得るべき大司教のスピーチの中にヘンリーの英雄化にとってマイナスの効果をもたらす要素の存在が認められる点である。引用の後半部に頻繁にあらわれる王位篡奪への言及、即ち、“deposed”(65)、“usurp’d”(69)、“the usurper Capet”(78)などの表現はヘンリーに対する諷刺的パロディーと読み取ることさえできる。彼自身、父親がリチャード二世を退位させることによって手に入れた王冠を戴いている君主である。カンタベリーの大司教は今回のヘンリーの行動の正当性を認めるためにこれらの歴史的事実に言及しているわけだが、それは、他方、ヘンリーの国内での立場を危うくする要素ともなり得る。大司教がスピーチを締め括る時に用いる“to hide them in a net”(93)というフレーズには、自身が抱える問題の本質を国外に逸らそうとしているヘンリーの行為そのものを揶揄する諷刺の機能さえ認めることができる。

大司教のスピーチは偉大で輝かしいものとされる「歴史」が歴史上の権力者の都合に応じ、創られてきたことを証明している。それは、端的に言えば、法文の主観的文言解釈と、国王の王権獲得に至る過程を権威づけるための正当性の主張がもたらした「歴史」である。この場面はヘンリーと大司教との間で新しい「歴史」を作り出す試みがなされるまさにその瞬間を描いている点で、彼ら為政者に対する諷刺的パロディーとなる。ここで大司教が自説を正当化するために引く歴史的事実は、実際、フランスにおいて権力者が「歴史」の形成初期過程において採った政策を列挙したものである。それゆえ、この場面におけ

る諷刺の対象はヘンリー自身ではなく、自らの「歴史」を新たに形成する際に都合に応じ自由で利己的な解釈を許してきたフランスの為政者の強引な自己解釈の論理自体に直接は向けられているはずである。だが、ヘンリーが拾って大司教に手渡す書類には、皮肉なことに、彼自身が現在英国王であることと、彼の父親がかつて王位篡奪行為をはたらいたこととの間に相関関係がある点を観客に意識させるべき歴史的記録が記されている。大司教のスピーチはフランスにおける歴史への言及でありながらも、ヘンリーの政治的地位の基盤の脆弱さを暴露する危険性を孕んでいる。

第二の該当箇所は、ヘンリーの迫力あるスピーチによって観客の愛国心が掻き立てられる様子が映しだされる場面である。ヘンリーが長年のライバル国であるフランスの使節を相手に終始優位に立ち、毅然たる態度でもって完膚無きまでに威圧する場面は、観客であるイギリス人には実にこの上ない小気味よさをもたらすであろう。彼らは英国に輝かしい勝利をもたらした王に備わる英雄神話の力によって狂信的陶醉の境地に導かれてゆく。だが、その瞻仰の陰に隠れて目立たないが、この場でカリスマ性を発揮する英雄王の台詞にもヘンリー個人が抱える問題が端的に示されている。

And we understand him [the Dolphin] well,
How he comes o'er us with our wilder days,
Not measuring what use we made of them.
We never valu'd this poor seat of England,
And therefore, living hence, did give ourself
To barbarous license; as 'tis ever common
That men are merriest when they are from home.
But tell the Dolphin I will keep my state,
Be like a king, and show my sail of greatness
When I do rouse me in my throne of France. (1. 2. 266-75)

彼が英国王の地位を軽んじて放蕩に身を投じていたと言及する箇所には、ある虚偽性が認められる。彼がヘンリー 4 世の第一王子の身分であった時から既に来るべき将来の困難を切り抜けるための戦略を練り、それを実行していた点は、この作品に先行する芝居『ヘンリー 4 世』を観た者にとっては周知の事実である。彼がいわゆる政治の舵取りの方向を見定める才能に長けているという点はシェイクスピアが一貫して強調している事実であり、この引用の箇所からもヘンリーがフランス国王の地位を得ることでイギリス国王としての自らの地位を堅固なものにしようとしている点がわかる。彼がここでイギリス国王の地位に、フランス国王のそれと比べ、相対的に低い価値しか認めていないかのような表現をする背景には、国民の意識を国外に向けることによって自身の抱える問題が顕在化することを防がなければならない彼個人の事情がある。この点は、この場面を締め括る以下のヘンリーの積極的な演説にも明確に示されている。

Therefore, my lords, omit no happy hour
That may give furth'rance to our expedition;
For we have now no thought in us but France,
Save those to God, that run before our business.
Therefore let our proportions for these wars
Be soon collected, and all things thought upon
That may with reasonable swiftness add
More feathers to our wings; for, God before,
We'll chide this Dolphin at his father's door.
Therefore let every man now task his thought,
That this fair action may on foot be brought. (1. 2. 300-10)

ヘンリーの命題はフランスとの戦いにあくまでも固執し、勝利をおさめる点にある。その行為を通じてのみ、彼は英国王としての地位の安全性を維持し得る。

ヘンリーの英雄化の一方で、この事実への言及がテキストに存在している点は意識されるべきである。

映画『ヘンリー 5 世』の中で、Kenneth Branagh は Olivier の時代とは異なる近代的な演出により、独自の批判精神を存分に発揮しつつ、Olivier が描いたヘンリーの英雄像の完璧さに、ある種の揺さ振りをかけた。それはヒロイックなものが放つ栄光の陰に苦悩を抱える人々が隠れ見落とされがちであるという事実を指摘した、画期的かつ意欲的な演出法である³⁾。彼はヘンリーとイーストチープの連中との隔絶、そして、その結果もたらされる彼らの悲劇的結末に焦点を当てる。放蕩王子ハルから理想的君主ヘンリー 5 世への変貌はシェイクスピアが英国の生んだ名君ヘンリーを栄光化するためには必要不可欠な要素であったと推測されるが、下品な言葉を喋る彼らはヘンリーの王としての権威を落しめる危険性を多分に有しているが故に、この作品では意図的にヘンリーの身辺からは遠ざけられているように思われる。彼らが王と一緒に舞台に姿を見せ、台詞を交わす場面はほとんどないに等しい。だが、こうしたヘンリー 5 世の名声への配慮の形跡が認められる一方で、この戦争によって犠牲を強いられるのは他ならぬ庶民階級であるという点を指摘していると見做すことのできる箇所もテキストには、また同時に存在している⁴⁾。Branagh の演出には、人間ヘンリーを描写するために後者の点も同時に強調して描こうとする基本姿勢が認められる。そのような描写がなされている場面においては、Branagh の本意に反して、ヘンリーの王としての冷酷な一面に対し諷刺的な描写であると見做す解釈も可能となる。これはシェイクスピアのテキスト自体が、ある種の曖昧性を内包している点に起因する。以下、その点についての考察をすすめる。

Branagh は『ヘンリー 4 世』の場面、台詞をそのまま断片的に『ヘンリー 5 世』のテキストに組み込むことにより、フォールスタッフの死がもたらす寂寥感を強調して示すことに成功している。テキスト上では、彼の死は第二幕第三場のクイックリーの台詞によって観客に報ぜられるのみであるが、この映画ではフラッシュバックの導入により、この老騎士喪失という事件がもたらす悲

劇性がより高められている。この創作された場面は観客のペイソスを高揚させ、フォールスタッフに対する彼らの同情を生む。その結果、このエピソードはヘンリーの冷酷なマキャベリ的政策に対する観客の反発感を、程度の差こそあれ、掻き立てる要素となる。

Branagh の演出は、テキストでは直接的明言が避けられている部分を映像化することによって、作品が示唆していると見做すことのできる、いわゆる“authorial intentions”の一つの可能性の提示を図ろうとしたものであるといえる。バードルフの絞首刑に関する情報が与えられるテキスト上の一場面には、上述のフォールスタッフ臨終の場面と同様、この意図に基づいた映像作りがなされている。実際、『ヘンリー5世』のテキストにはバードルフの処刑を主張する台詞がヘンリー自身のもので確かに存在する (see. 3. 6. 107-13)。だが、ヘンリーがこの昔馴染みの友人に対してとった行動に関しては、テキスト上では、このように、ごく簡単な言及がなされているのみである。このことはバードルフのエピソードに関し、全く異った解釈をもたらす結果となる。王としての体面の保持のため止むなく命令を下したヘンリーが感情を抑えつつ、バードルフの処刑を堪え忍び、見守る姿を、そして、王の温情を得ることなく絞首刑に処せられるバードルフの哀れな姿を、Branagh は印象的に描く。この叙情的演出はヘンリーが王であるゆえに抱ねばならない内面の苦悩を強調して観客に伝えるものである。彼は軍法を曲げ昔の仲間の命を救うことよりも自らの名声を守ることを選ばざるを得なかったヘンリーの王としての辛さを強調する。だが、この言及の箇所が問題性を孕んだ対象として観客に明確に意識されるかどうかという点についての議論は他に譲るとして、テキストに存在するこの台詞自体がヘンリーの冷徹さに対して諷刺の効果をもたらし得る可能性が全くないとはいえない。バードルフに科せられる現実的な死刑の刑罰は為政が時に、不条理にも、庶民にもたらす悲劇の冷酷さを象徴的に示すエピソードであるかのようにも思われる。そのように解釈した場合、これは英雄像というのが持っている欠陥を鋭く指摘したエピソードであるといえよう。シェイクス

ピアのテキストには、そこに冷酷な王に対する諷刺が用意されているとの解釈を許す、ある種の曖昧さが存在している。

II

『ヘンリー 5 世』に用意された諷刺はヘンリー王自身に向けられているというより、政治の裏側で策略をめぐる教会側へとその対象が逸らされている。この点は、おそらくは、シェイクスピアおよび彼の属する劇団の政治的配慮に基づく工夫であると推察される。

第一幕第一場に相当する場面では、教会が現在抱えている問題とその打開策が顕著に示される⁵⁾。そこでは、ヘンリーのフランス出兵が教会側の利益にとって最も好都合な要素として歓迎されるという点が強調され、教会の政治的暗躍がとりわけ印象づけられている。戯曲において、第一幕第一場で与えられる情報はきわめて重要な価値を持つ。それは劇の展開に方向性を与える機能を果たすと理論的には考えられるからである。『ヘンリー 5 世』は、そのテキストがクォートに基づくかフォリオに基づくかにより、その開幕シーンについては二種類の演出が可能となる。即ち、第一幕第一場を全く無視して第一幕第二場から上演を行うか、もしくは、時間短縮のための台詞のカットは多少はあっても、第一幕第一場から芝居を始めるかの二通りの演出である。一般的にいえば、第一幕第一場から上演を始めた場合の方が観客の問題意識は王そのものよりも教会へと移る。そして、おそらくは、この劇的效果を劇団側は狙ったのではないかと推測される。

第一幕第一場には教会側の戦略に対する諷刺的表現が認められる。その典型は以下に引用する部分であり、この芝居を観ているであろう英国庶民階級はその点を無意識に理解したものと推察される。

Cant.

... If it pass against us,

We lose the better half of our possession;
For all the temporal lands, which men devout
By testament have given to the Church,
Would they strip from us; being valu'd thus:
As much as would maintain, to the King's honor,
Full fifteen earls and fifteen hundred knights,
Six thousand and two hundred good esquires;
And to relief of lazars, and weak age
Of indigent faint souls past corporal toil,
A hundred almshouses right well supplied;
And to the coffers of the King beside,
A thousand pounds by th' year. Thus runs the bill.

Ely. This would drink deep.

Cant. 'Twould drink the cup and all.

Ely. But what prevention?

Cant. The King is full of grace and fair regard.

Ely. And a true lover of the holy Church. (1. 1. 7-23)

ここに問題点は二つあり、それらは共に、教会側の政治的戦略に対する観客の反感を高める要素となっている。第一の問題点は、教会側が私的利益の擁護のためにヘンリーを利用している事実にある。この点は比較的容易に観客に意識されると考えられる。第二の問題点は、前者より更に辛辣なアイロニーの効果をもたらし得ると思われる情報を簡明に叙述している箇所、即ち、教会側がこの戦略によって没収を免れようとしている所領は王権を強化するための目的のみならず、いわゆる下層階級救済の目的のために有効利用されるはずであったという内実を暴露している箇所に認めることができる。この描写に示される社会問題の深刻さはともすれば全く無視されてしまうか、たとえ意識

されたとしても、教会側の保身行為そのものに対する非難の領域に留められることが多いように思われる。だが、この情報それ自体がもたらす劇的効果の可能性に関する議論は当然なされるべきである。⁷⁾以下、その点について論ずる。

シェイクスピアの歴史劇のテキストには庶民階級の観客の批判精神を導くべき要素が数多く存在する。その要素の一つである土地問題への言及は、劇団側がこの戯曲の創作において民衆の存在というものを多分に意識し、それを演劇上の重要な要素として受けとめていた点を裏付ける有力な証拠となる。英国において、15世紀より徐々に始まりつつあったエンクロージャー運動は、16世紀にはほぼ完全に浸透し、シェイクスピアの時代の観客にとっては全く身近な時事問題となる。シェイクスピアの歴史劇において、その初期の作品とされる『ヘンリー 6 世 第 2 部』のテキスト上に、この社会問題に対する言及が既に見られる (see. *2 Henry VI*, 1. 3. 20-22, 4. 2. 68-69)。一方、本作品、『ヘンリー 5 世』の第一幕第一場において、シェイクスピアは教会側の腐敗、即ち、世俗的利益に固執する聖職者の精神的墮落の様相を当時の民衆にとって深刻な事項であった土地問題と融合させることによって、その社会的問題性を見事に浮き彫りにしている。

シェイクスピアのドラマトゥルギーの特徴の一つは、この例に見られるように、ある中心的制度がもたらす不条理に対し、観客の批判精神を喚起すべき要素をテキストに盛り込む点にある。『ヘンリー 5 世』の冒頭の場面には、教会側の経済的特権環境、ならびに、権威を王に付与し、その行為の正当性を保障する立場にある彼らの政治的優位性、さらには、為政者たる王の今回の決断に対し、あるアイロニーと諷刺の衝動を導く表現が認められる。シェイクスピアがテキストで敢えてこの社会的問題に言及しているという事実に着目し、その描写の必要性を考察すると、その理由の一つとして、作者が観客の愛国心を掻き立てるといふ単一の目的のみを目指したのではなく、むしろ、ヘンリーの英雄像を支える「崇高な」行為、即ち、武勇を通じて得られる名声を希求し、殺戮を行なう英雄的な行為、また、為政者側の体制を維持するために採られてい

る制度、即ち、それが自明の理として受容されるための政治的、社会的、文化的土壌が生み出す不都合に問題意識を持ち、それらが観客のアイロニカルな視線を集めるようにと意図したからにちがいないと憶測することができる。シェイクスピアの英国歴史劇が単なる英雄賛美、審美的ロマンティシズムの追求のみに留まらず⁸⁾、他方で、彼の芝居を観るために劇場に集う観客層の嗜好要求を満たすため、民衆にとって切実で現実的な社会問題にも必ず触れ、それをテキストに示し得ている点に作品としての生命力の源を認めることができる。『ヘンリー5世』こそは、この劇作家の作劇における基本的姿勢、即ち、ヒーローの英雄化にとって不利に働くかもしれない危険性が一方では予測されるにも拘らず、民衆の目から見た社会問題の指摘をテキスト上で敢えて行なおうとする、現実直視の態度が認められる作品の典型である。そこには、作者独自の優れた洞察力によって、人間社会の仕組や人生の機微のありさまが鋭く描かれている。

上演技法的には、第一幕第一場には特に重要な機能が与えられることが多い。以下、カンタベリーの大司教とイーリー司教がヘンリーの改心ぶりを誉める台詞を交わす場面において、二人の会話中に観客が反語的意味を読み取れる要素が存在する点を指摘し、その劇的効果の可能性について論ずる。

Cant. The courses of his youth promis'd it not.
The breath no sooner left his father's body,
But that his wildness, mortified in him,
Seem'd to die too; yea, at that very moment,
Consideration like an angel came
And whipt th' offending Adam out of him,
Leaving his body as a paradise
T' envelop and contain celestial spirits.

.

Ely. We are blessed in the change.
Cant. Hear him but reason in divinity,
And all-admiring, with an inward wish
You would desire the King were made a prelate;
Hear him debate of commonwealth affairs,
You would say it hath been all in all his study;
List his discourse of war, and you shall hear
A fearful battle rend' red you in music;
Turn him to any cause of policy,
The Gordian knot of it he will unloose,
Familiar as his garter; that, when he speaks,
The air, a charter'd libertine, is still,
And the mute wonder lurketh in men's ears
To steal his sweet and honeyed sentences.... (1. 1. 24-50)

この部分には、とりわけ、ヘンリーの善転変貌を逆に諷刺の対象として観客に認識させるようないくつかのアイロニカルな表現を認め得る。第一は、ヘンリーが聖職者である彼らの目に、『天使のような』(“like an angel”) (28)、『神学を説く』(“reason in divinity”) (38)、好ましい王として映り、教会の主義、思想に関するプロパガンダを広く、ただで施してくれる『(高位) 聖職者』(“a prelate”) (40) のイメージでもって捉えられている点である。この描写は彼らが王を政治的に利用できる道具として理解しているかのような印象を与える。第二は、イーリー司教の “We are blessed in the change.” (37) という台詞である。この台詞にはヘンリーの変貌ぶりが教会側の利益を守る際に役立つという、観客の側の意味の読み取りを可能ならしめる、非常にアイロニカルで現実的な響きがある。このことは、それが短い一文の中で、伝えたい情報を最もコンパクトかつ劇的に示している点と関係している。彼の台詞は司教がへ

ソリーの改心を心の底から喜んでいる様子を最も効果的に伝える。第三は、二人の聖職者が実利に基づく現実的な政策を展開する一方で、ヘンリーが王に備わるカリスマ性によって国民の愛国心を掻き立て、「祖国のために死す」(“pro patria mori”)という命題を自ずと民衆に受け入れさせてくれることに言及した箇所である (cf. 43-4, 47-50)。戦争の現実の厳しさもヘンリーの口を媒介にすれば甘美な音楽として聞こえ、その曲は国民の耳を魅了する。だが、この全体主義を崇高化する音楽、即ち、個人を英雄的な行為に駆り立て、自己を埋没させる危険性へと導く幻想的な音楽が、ヘンリーと王の行為の正当性を証明する聖職者との相互依存関係によって奏でられる点を理解するならば、これらの台詞を反語的に読み取ることは全く自然である。

聖職に携わる者がここで政治的な目的のために法律の問題を論じている点は、彼らが俗世間での利益の問題に捉われているという点で滑稽さをもたらす。従って、この場面では、教会側がその戦略において王を利用しようとしている点に専ら観客の問題意識が集中するであろう。だが、実際には、一方で、ヘンリーも、また、教会側を利用することにより、自らの王位を保持する戦略を展開しようとしている。この点は明確に意識されるべきである。この戯曲の中では、次の場面でそれぞれの立場を守ろうとする闘争が行なわれる。そこには、ある政治力学が働いている。

第一幕第二場は高度の政治性を帯びた場面である。この場面において、教会側の後方支援こそがヘンリー自身と教会側の両者にとって貴重な利益をもたらす必須要素である点が、観客の前で繰り広げられる両者の緊張した駆け引きの中に示される。舞台において、この場面に登場する人物間の利害関係は王が最終決定を下すまでの役者たちの身体の動き、その台詞に込められた情感とによって示されるが、Branaghの映画において見られる演出はこの場面の緊張感を効果的に伝える一例である。Branaghは、どの人物が、どの人物を見ているかという点を巧みなカメラワークによって明確に描く。彼の演出は切実な現実の要求に迫られた個人の訴えを、その人物が向ける視線の印象によって伝えよ

うとするものである。彼は聖職者と貴族がヘンリーに戦争への決断を半ば強制的に求めている姿を印象的に描く。この演出においては、このような形で王の決断が下される背景に大司教たちの政治力が働いている点が強調され、国王はこの決定に対し、その直接的な責任を負うべきではないという演出家 Branagh の趣旨が示唆される。

一方、ヘンリーの苦況、即ち、大司教たちの要求を受け入れ、戦争を行なわざるを得ない状況に彼がある点を強調すれば、国王の政治基盤の脆さに、ある程度、触れざるを得ないという逆説が生ずる。このことはヘンリーの英雄像に、あるアイロニーをもたらす。ヘンリーにとって最大の問題は父ヘンリー 4 世がリチャード 2 世から王位を篡奪した点にある。そのため、彼は本作品において、『ヘンリー 4 世』終わり近くの父子の対面の場面で父親ヘンリー 4 世から聞かされた教訓を忠実に守らざるを得ない (cf. *2 Henry IV*, 4. 5. 177-219)。特に、“Be it thy course to busy giddy minds / With foreign quarrels...” (213-15) というくだりは、この作品でヘンリーが採るべき、王としての政策を明確に指示したものである。

王と聖職者の相互依存関係に対する諷刺は、ヘンリーが頻繁に口にする“god”という言葉の響きの蓄積によって強化されているように思われる。この作品においてヘンリーが神について言及する頻度は、きわめて高い。彼が神に対し言及する度ごとに第一幕第一場、及び、第二場に示されるヘンリーと教会側との相互利益関係が観客に想起されるとしたら、これほど効果的に彼ら中心的制度の維持をはかる為政者に対する諷刺をもたらす表現はあるまい¹⁰⁾。シェイクスピアは本作品でヘンリーの偉業の栄光化を行なうと同時に、今回の戦争により犠牲になる者の苦しみを描くことも忘れてはいない。作家は登場人物が神の名を口にする時、それがアイロニカルな響きをもった言葉になるように工夫している。

この作品では教会側の腐敗体質が劇の冒頭で暴露されているため、イーストチープの連中の悲劇の場面において批判の対象がヘンリーだけに向けられる危

陰性が回避されている。この効果は、信仰を示す彼らの姿と聖職者側の世俗的利益を追求する姿とのギャップが描かれることによって得られる。イーストチープの連中が見せる信仰心は聖職者の墮落に対するアイロニーになると同時に、為政者側の内実の真相を知らずにその指示に盲目的に従う彼らの行為そのものに対するアイロニーにもなっている。

その第一の例は、フォールスタッフの臨終の様子を伝えるクイックリーの台詞の中に見られる。

“How now, Sir John?” quoth

I, “what, man? be a’ good cheer.” So ’a cried out,

“God, God, God!” three or four times. (2. 3. 17-19)

“God, God, God!”とフォールスタッフほどの不遜で豪放な人物でさえ、臨終の際には神の名前を叫ぶ。だが、現実には教会側は所領の没収をいかにして回避するかという方面の画策に専心しており、フォールスタッフの信仰が彼らの勤行を通じ十分な報いを受けるだろうとはいえない。むしろ、今回の徴兵によって戦争へ駆りだされる犠牲者が他ならぬ庶民階級の者を中心としているという点を考慮すれば、彼らの信仰が裏切られるべき運命にあるという点で、下層階級の人間に交わり、彼らの生活を究極的に表象するフォールスタッフのこの叫びは、この上ないアイロニーとなる。

第二の例は、バードルフの処刑に関する言及がなされる場面に見られる。戦いの混乱に乗じ、バードルフ、ピストル、ニムの、三人の下層階級の人間が金品を盗んでいるという情報は第三幕第二場における小姓の証言によって得られる。彼らは、いわゆる“carpe diem”、即ち、飲食を愛し、現世での生に楽しみを見い出そうとする享乐的な思想を実践している連中であるから、日頃は宗教など軽蔑している部類の人物であろうと推察される。バードルフが処刑される理由は掠奪を行なったためとテキストでは説明されているが、そこに作者の

痛烈なアイロニーの意図を認め得る。

Fortune is Bardolph's foe, and frowns on him;
For he hath stol'n a pax, and hanged must'a be—
A damned death!
Let gallows gape for dog, let man go free,
And let not hemp his windpipe suffocate.
But Exeter hath given the doom of death
For pax of little price. (3. 6. 39-45)

バードルフが盗んだ品物が“a pax”、“pax of little price”であったという点に作者のアイロニーをイメージ的に観察することができる。¹¹⁾この描写において、“pax”という単語がとりわけ意識的に二度繰り返して用いられている点は特に留意されるべきである。この単語に込められたイメージの広がり効果を注意深く考察しながらピストルの台詞が伝える内容を以下に示すように解釈した場合、その描写は教会側に対して批判的、バードルフに対してアイロニカルなものとなっていることがわかる。即ち、バードルフは戦争に従軍し、平和（キリストの磔刑の図案のついた聖板）に手を伸ばしたがために死刑に処せられる運命になったと、この台詞を読み取ることができる。ここに、聖なるものが貧しい下層階級の人間にもたらすものの価値を疑問視するシェイクスピアの諷刺的描写が用意されていることは否めないであろう。

他方、バードルフのエピソードは民衆の盲信的な英雄崇拜、即ち、この場合、具体的には、カリスマ性を持った君主が掲げる正義のために献身的に従軍することに対する一種の警句としての機能も果たす。

K. Hen. What men have you lost, Fluellen?

Flu. The perdition of th' athversary hath been

very great, reasonable great. Marry, for my part, I think the Duke hath lost never a man, but one that is like to be executed for robbing a church, one Bardolph, if your Majesty know the man. His face is all bubukles, and whelks, and knobs, and flames a' fire, and his lips blows at his nose, and it is like a coal of fire, sometimes plue and sometimes red, but his nose is executed, and his fire's out.

K. Hen. We would have all such offenders so cut off; and we give express charge that in our marches through the country there be nothing compell'd from the villages; nothing taken but paid for; none of the French upbraided or abus'd in disdainful language; for when [lenity] and cruelty play for a kingdom, the gentler gamester is the soonest winner. (3. 6. 97-113)

この引用の箇所の後半部でシェイクスピアは特に、英雄像というものが自己の行為の軌跡を栄光化する際に冷酷なマキャベリの方策の選択を余儀なくされるという事実をアイロニカルな表現によって問題化し、ヒロイズムが持つ欠点、即ち、英雄が行為の正当性を主張する場合、人間としてのモラルから容易に外れてしまう傾向にある点を明確に指摘している。バードルフは平和で居心地のよい生活を犠牲にしてまでフランス出兵に加わった。それにもかかわらず、つまりぬ盗みを働いたがために、皮肉にも、昔馴染みのヘンリーその人自身から冷酷な処刑命令を下される。バードルフの払った尽力、即ち、平時において得られる安楽を放棄し、その幸せな生活を犠牲にしたことに対し王の酌量が全く与えられない点は、観客のバードルフへの同情心を誘う。他方、ヘンリーの寛容さが昔の仲間にはなく敵国フランスの民衆に灌がれるという点には、作者

の英雄像に対する冷静なアイロニーの意図が認められる。ヘンリーが自己の「歴史」の正当性を主張し、それを栄光に満ちたものにするためには、何よりも優先しなければならぬ制度上の節理がある。ヘンリーの英雄像は、この作品においては「貴重な何物かが失われている¹²⁾」と指摘されるように、下層階級の人間の幸福をその代償として奪うことにより得られている。パードルフこそは我知らず、非情な運命の女神が仕掛けた罠に陥れられた犠牲者である。パードルフのエピソードは彼に代表される庶民が英雄を盲信的に崇拝することに問題性を唱える作者の批判的な見解が示された一例である。

以上、見てきたように、シェイクスピアのテキストにはヘンリーに対し批判的な描写と見做すことのできる表現が多く存在している。しかし、このように王制批判に通じるような政治的に危険な描写を劇団側が敢えて行ったことの主たる理由は、ヘンリー個人が持つ人間的な弱さを示すことによって庶民の共感を引き出す効果を第一の意図としたからに違いない。この作品では放蕩王子ハルから名君ヘンリー 5 世への変貌描写の失敗がしばしば批判の対象となるが、英雄像というものが持っている欠陥を示すことは、逆に、王の人間性を強調することにもなり得る。アジンコートでの戦い前夜に王が変装して一般兵士の中に紛れる場面を設定し、そこでヘンリーに人間的弱みを表出させる台詞を述べさせている点は意図的であり、それが観客の共感を得るために必要な創作上の一手段であったことを裏付ける証拠となる。

ヘンリーの英雄化を観客の嗜好、観劇を通じて得られる満足感といかにうまく有機的に結びつけて達成するかという点はグローブ座をフランチャイズとする大衆劇作家シェイクスピアにとって重要な課題であった。そこで、シェイクスピアはヘンリーの対外軍事行動の描写においてヘンリーを単なる英雄叙事詩のヒーローとして、即ち、あらゆる名声によって人格を高められた理想的な勇者として描くことを避け、諷刺的表現を用いた鋭い問題指摘により、王や聖職者に代表される権力者の政治的戦略によってもたらされる社会の悲惨な相も、また同時にテキストに記載する点を試みた。この点を裏付ける事実、即ち、テ

クストに存在する含意的な表現から判断して、シェイクスピアが庶民の批判精神を刺激し、その諷刺的感性を引き出す点をこの作品の創作において意図したことは間違いない。庶民にとって政治的スキャンダルへの言及は興味を惹かれる題材として歓迎された。¹³⁾ 日常では口にするのでできない自分たちの思いが劇空間という虚構空間の中で、その気持ちを代弁する人物の台詞を通じて伝えられる時、観客には、ある種の満足感がもたらされるからである。

一方、こうしたプロブレマティックな表現は、批判内容の過激さの度合いによっては、反体制運動を誘発する要素として為政者側に危険視される可能性を有している。シェイクスピアの時代に多く見られる筆禍事件は、戯曲のテキストに登録された政治的に危険な描写が権力者によって問題視された事実を示す。権力者による芝居の検閲によって、また、筆禍事件を恐れる劇作家の諷刺的表現の自己規制によって、演劇の主題は描写可能な範囲が制限される。

『ヘンリー5世』において、芝居の上演自体が困難となる危険を回避するために劇団側は諷刺の対象をヘンリー自身から教会側へと移動させた。劇団側のこうした配慮は、下層階級の登場人物が経験する不当な抑圧、悲劇が、王の失政に根源的原因があるというより、むしろ、教会側の世俗的な欲望によって引き起こされるものとして理解されるように観客の意識を導く。この戯曲では、とりわけ、第一幕第一場の幕開きに教会側の暗躍を印象づけるような場面が置かれている。これは舞台効果の点から見て、非常に作為的な場面である。カンタベリーの大司教とイーリー司教が兩人だけの密室での会談を行なっている場面を観客に提示した場合、教会側の、社会の表面からは見えにくい策略の実態、即ち、王を政治的に利用しようとしている点が明確となり、かつ、諷刺の直接的な対象を王ではなく教会側に逸らすことができる。この責任の分極化は優れたヒロイズムに対する配慮、ひいては、検閲対策にもなり得た。他方で、こうした作劇上の工夫は庶民の人間ヘンリーに対する共感と結び付き、観客は英国を代表する名君ヘンリー5世を自分達の英雄として捉えることができたのである。

註

- (1) Cf. Kenneth Branagh, *Beginning* (London: A.P.Watt Ltd., 1989).
- (2) シェイクスピアの戯曲テキストからの引用はすべて、*The Riverside Shakespeare*, ed. G.Blakemore Evans (Boston: Houghton Mifflin Company, 1974) による。
- (3) Cf. 'Kenneth Branagh's "Henry V" : The Gilt[Guilt] in the Crown Re-Examined', a review essay by Kenneth S. Rothwell, *Comparative Drama*, Vol.24(1990-1991), pp.173-78; Chris Fitter, 'A Tale of Two Branaghs: "Henry", Ideology, and the Mekong Agincourt', *Shakespeare Left and Right*, ed. Ivo Kamps (London: Routledge, 1991), pp.259-75.
- (4) Cf. Victor Kiernan, *Shakespeare: Poet and Citizen* (London: Verso, 1993), p.69: "War-weariness was growing in England in the few years before Ireland was 'pacified' and James I put an end to the fighting with Spain. Shakespeare was thinking of ordinary folk who suffered under the burdens of war, as well as of the warlords."
- (5) この場面の台詞は『ヘンリー五世』の三種類の四つ折本、即ち、Q 1 (1600)、Q 2 (1602)、Q 3 (1608 [1619]) には全く存在しないが、1623年の第一二つ折本、F 1 には収録されている。
- (6) Cf. 喜志哲雄、「『リア王』の成立」、『ALBION』New Series Number 36, October 1990, p.26.
- (7) ここで指摘する第二の問題点に関して、Kiernan は観客の意識との関係において、次のような可能性を示唆している。See. Victor Kiernan, *op. cit.*, p.71: "That there will be a positive loss — of the church wealth that Parliament could have applied to useful purposes — is not emphasized; but we may suppose that a post-Reformation audience would be alert enough to see such points."
- (8) Cf. 平田満男、「『ヘンリー五世』隠された構造」、『シェイクスピア全作品論』、1992年、研究社、pp.184-92.
- (9) See. Marvin Spevack, *A Complete and Systematic Concordance to the Works of Shakespeare* (Hildesheim: Georg Olms Verlagsbuch handlung, 1968), Vol. II.
- (10) Cf. Ernst H. Kantorowicz, *The King's Two Bodies: A Study in Mediaeval Political Theology* (Princeton: Princeton University Press, 1957), Chapter II, pp.42-86.
- (11) Cf. *The Oxford English Dictionary*, 2nd ed. (Oxford: Clarendon Press, 1989). "L. *pax* peace, in Christian L. also the kiss of peace." "3. *Eccl.* A tablet of gold, silver, ivory, glass, or other material, round or quadrangular, with a projecting handle behind, bearing a representation of the Crucifixion or other sacred subject, which was kissed by the celebrating priest at Mass, and passed to the other officiating clergy and then to the congregation to be kissed; an osculatory." 尚、Holinshed の年代記には "pax" ではなく、"pyx" と記されている。See. *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*, ed.

- Geoffrey Bullough (London: Routledge and Kegan Paul, 1962), Vol. IV , p.361. その場合、*OED*は、“2. *Eccl.* The vessel in which the host or consecrated bread of the sacrament is reserved.” という説明を与えている。
- (12) See. Victor Kiernan, *op. cit.*, p.68.
- (13) 本作品の創作時期は16世紀末頃であると推定される。See. Geoffrey Bullough, p.347; Kenneth Muir, *The Sources of Shakespeare's Plays* (London: Methuen & Co. Ltd., 1977), p.106. それゆえ、この戯曲はアイルランド遠征を想起させるメタファーとして当時の観客には認識されたかもしれない。